

# 青年期における自我強度、自尊感情、自己効力感の関係

長尾 博

## [問題と目的]

本研究は、青年期心理療法の各流派に共通する効果基準についてを明らかにするために学校段階と性別に自我強度 (ego strength)、自尊感情 (self-esteem)、自己効力感 (self-efficacy) の関連を検討するものである。

今日、心理療法の流派は数多く、また、心理療法とは何かの定義も一様ではない。筆者は、将来、わが国の心理臨床活動において各種心理療法の効果について明らかにしていく accountability に迫られるであろうと考えている。しかし、心理療法の効果を明らかにするといっても誰が (治療者か、クライアントか、それとも第三者か)、また、いつ (治療終結即時かそれとも終結してしばらく時間が過ぎてか)、そして何を治療効果の基準にするのかという大きな課題がある。

わが国の臨床心理士の心理面接で用いる技法についての調査結果では、精神分析・分析心理学的アプローチが42.4%、人間性心理学的アプローチが51.3%、行動療法的・認知療法的アプローチが39.7%、そして折衷的アプローチが73.7%であるという報告がある (日本臨床心理士会、2006)。この結果から折衷的アプローチが最も多いものの、心理療法流派の主流としては、精神分析療法学派、人間性心理学派、行動療法学派の3つに大別できることがわかる。

この3つの学派の心理療法の効果基準については、精神分析療法学派は自我強度の程度 (Freud, 1916)、人間性心理学派は、自尊感情の程度 (Maslow, 1962)、行動療法学派は、症状や問題行動の除去と自己効力感の程度 (Bandura, 1977) があげられている。また、3つの学派の心理療法での効果基準が展開した事例研究としては、精神分析療法学派では、上地 (1991) による思春期

危機を克服した事例や後藤（1998）の青年期境界例の治療過程が、また、人間性心理学派では、中原（1995）の身体疾患の多い患者へのカウンセリング過程や金子（2016）のうつ病患者へのカウンセリング過程が、また、行動療法学派では、小泉・平口（2004）の強迫性障害のクライアントへの認知行動療法過程や古賀・前田・津田（2007）のドメスティックバイオレンスを受けたクライアントへの認知行動療法過程があげられる。

しかし、これまで自我強度、自尊感情、自己効力感の3つの関連を明らかにした研究はない。そこで筆者は、自我強度、自尊感情、自己効力感の3つの関連を明らかにすることによって、3つの学派の心理療法効果基準の共通点を見出させるのではないかととらえ、本研究ではこれら3つの関連を明らかにしていくこととした。

心理療法とは、カウンセラー（治療者）とクライアントとの関係を通してどのようにして行うかについてクライアントのインフォームドコンセントにもとづいて行うものであるが、その際、クライアントへのアセスメント（日本心理臨床学会、1991）や暦年齢と病態水準（小此木、1976）、それに性差（長尾、2016）のパラメーターを考慮して行うことが重要であると思われる。この見解にもとづいて本研究では、病態水準を除外して健常青年を対象に、自我強度、自尊感情、自己効力感の3つの学校段階差と性差をみていき、学校段階差と性別に3つの関連を明らかにしていくことにした。

## 【方法】

### 1. 調査協力者

九州圏の公立中学2年生98名（男子45名と女子53名）、高校は、大学受験中心の高校ではない私立普通科2年生110名（男子44名と女子66名）と大学受験中心の高校である公立普通科2年生85名（男子42名と女子43名）、大学は、女子に対しては私立女子大学2年生86名（福祉学部50名と文学部36名）、男子に対しては私立大学工学部2年生28名と2つの国立大学教育学部2年生61名

## 2. 調査時期と手続き

公立中学校、私立高校、私立女子大学文学部、私立大学工学部の生徒・学生に対しては、2013年5月に筆者が各学校で一斉に実施した。また、公立高校、私立女子大学福祉学部、2つの国立大学教育学部の生徒・学生に対しては2015年11月に筆者が各学校で一斉に実施した。

### <測定尺度>

以下の3尺度は、信頼性と妥当性が検証されているために用いた。

(1) 自我強度をみるために長尾(2007)の自我強度尺度を用いた。この尺度は、中学生用(26項目)と高校・大学生用(24項目)とがあり、それぞれ4つの下位尺度から構成されており、回答は3件法で「はい」を3点、「わからない」を2点、「いいえ」を1点とし、得点が高いほど自我が強いととらえる。

(2) 自己効力感をみるためにSherer et al.(1982)の特性的自己効力感尺度を成田ら(1995)が日本語版に作成した尺度を用いた。この尺度は23項目からなり、回答は5件法で「強くそう思う」の5点から「全くそう思わない」の1点までで採点し、得点が高いほど自己効力感が高いととらえる。

(3) 自尊感情をみるためにRosenberg(1965)の自尊感情尺度を山本・松井・山城(1982)が日本語版に作成した尺度を用いた。この尺度は10項目からなり、回答は5件法で「非常にあてはまる」の5点から「全くあてはまらない」の1点までで採点し、得点が高いほど自尊感情が高いととらえる。

## 3. 倫理的手続き

本研究では、以下にあげる点を行うことによって、調査協力者に対する倫理的配慮を行った。質問紙のフェイスシートには、「それぞれの質問紙内容や得点は統計的に処理されるため個人の回答が問題とされたり、他の人の目に触れたりすることはないこと」「質問紙は研究終了後速やかに処分すること」と明記し、調査協力者のプライバシーの保障に配慮した。また、「調査実施の途中でいつでもやめることができること」を明記し、調査協力者の人権に配慮した。さらに、口頭の説明では、「研究に参加しないことによって、

不利益を被ることはないこと」「調査を途中で中断しても不利益を被ることはないこと」を伝え、参加者の安全面に配慮した。以上のような説明を行い、調査に協力することに同意を得た上で実施された。

## 【結果と考察】

### 1. 学校差について

Table 1 に 3 つの尺度の学校・学校段階・性別の平均値を示した。

Table 1 の結果をもとに学校差をみていくと高校の場合で大学受験が中心ではない私立高校と大学受験が中心の公立高校とを比較した結果、自我強度 ( $t(195) = 4.57, P < .01$ )、自己効力感 ( $t(195) = 3.30, P < .05$ )、自尊感情 ( $t(195) = 3.63, P < .01$ ) 全てにおいて公立高校のほうが私立高校よりも高いことが示された。このことから高校の場合、受験勉強という要因が高校入学以前と入学以後に自我強度、自己効力感、自尊感情の高さと関連していることが示唆された。

次に大学の男子の場合で、工学部の理系と教育学部の文系との比較をした結果、自我強度が教育学部男子学生のほうが工学部男子学生よりもやや強いことが示されたが ( $t(88) = 2.00, P < .05$ )、自己効力感 ( $t(88) = 1.82, n.s.$ ) と自尊感情 ( $t(88) = 1.52, n.s.$ ) には差がないことが示された。この自我強度の差について、今後、検討していく必要がある。

また、大学の女子の場合で、文学部の文系と福祉学部の理系との比較をした結果、自我強度 ( $t(85) = 0.79, n.s.$ )、自己効力感 ( $t(85) = 0.78, n.s.$ )、自

Table 1 3 尺度の学校・学校段階・性別の平均値

	中学校		高校				大学			
			公立高校		私立高校		男子		女子	
	男子 n = 45	女子 n = 53	男子 n = 42	女子 n = 43	男子 n = 44	女子 n = 66	工学部 n = 28	教育学部 n = 61	文学部 n = 36	福祉学部 n = 50
自我強度 尺度	51.51 (6.38)	51.57 (6.31)	54.10 (6.00)	53.72 (6.92)	51.39 (6.85)	50.14 (7.81)	49.53 (7.11)	51.63 (6.94)	53.69 (7.36)	54.54 (6.90)
自己効力 感尺度	65.02 (8.22)	67.43 (9.96)	68.66 (8.67)	67.35 (10.12)	64.09 (8.29)	66.97 (11.60)	61.03 (12.90)	65.31 (10.64)	65.82 (13.20)	67.21 (9.75)
自尊感情 尺度	24.28 (4.28)	25.79 (5.24)	27.63 (4.55)	27.42 (6.01)	26.34 (5.13)	24.72 (5.76)	28.96 (8.32)	27.22 (6.84)	26.97 (6.49)	27.24 (5.31)

( ) 内は標準偏差値を示す

尊感情 ( $t(85) = 0.30, n.s.$ ) 全てにおいて差がないことが示された。

## 2. 学校段階差と性差

Table 1 にもとづいて3つの尺度の学校段階差と性差をとらえてみた。自我強度尺度は、中学生用と高校・大学生用が別個であるため、高校と大学との学校段階差と性差との交互作用をみたところ、交互作用も ( $F(1, 370) = 2.54, n.s.$ )、学校段階差も ( $F(1, 370) = 0.70, n.s.$ )、性差も ( $F(1, 370) = 2.90, n.s.$ ) 認められなかった。これらの結果は、長尾 (2007) の結果と照合できた。

また、自己効力感については、学校段階差と性差の交互作用 ( $F(5, 468) = 1.11, n.s.$ ) や学校段階差 ( $F(2, 468) = 0.54, n.s.$ ) は認められなかったが、性差 ( $F(1, 468) = 4.00, P < .05$ ) が認められ、女子のほうが男子よりも自己効力感が強いことが示された。この結果は、同じ尺度を用いた成田ら (1995) の大学生の結果と照合できた。なぜ女子のほうが、男子よりも自己効力感が強いのかについては、後述する自己効力感と自我強度、及び自尊感情との相関係数の結果から女子のほうが男子よりも他者と相互に支え合っており、その中で自己が守られ、主観的な自己評価をしやすく、単独で自己が試される機会が少ないからではないかと推察される。

次に自尊感情については、学年差と性差の交互作用 ( $F(5, 468) = 1.62, n.s.$ ) と性差 ( $F(1, 468) = 0.80, n.s.$ ) は認められなかったが、学校段階差 ( $F(2, 468) = 4.22, P < .05$ ) が認められ、Ryan の多重比較の結果、中学生が高校生や大学生よりも自尊感情が低いことが示された ( $P < .05$ )。岡田・永井 (1990) による同じ尺度を用いた中学・高校・大学生を対象とした結果では、自尊感情は高校生が低く、全般に男子のほうが女子よりも高いことが示されている。なぜ本研究の結果で中学生のほうが高校生や大学生よりも自尊感情が低いのかについては、後述する思春期における第2次性徴にともなう Spranger (1924) のいう自我体験 (Ich-Erlebnis) を経験し、中学生時において一時的に自尊感情は低下していることがとらえられる。今後、この点を検証していく必要がある。

### 3. 3つの尺度の得点間の相関係数

Table 2 に学校段階・性別の自我強度、自尊感情、自己効力感の3尺度得点間の相関係数を示した。

Table 2 の結果から学校段階差や性差に関わらず、自我強度、自尊感情、自己効力感の3つは強い関連があることが明らかになった。このことから精神分析療法、クライエント中心療法、行動療法などの心理療法を行うにしてもこの3つの程度をその効果基準としてとらえていくことは適切であることが示唆された。

次に2つの尺度得点間の関連をみてみた。

#### 1) 自我強度と自己効力感との関係

Table 3 は、中学生の場合の自我強度尺度と自己効力感尺度との得点の相関係数をまとめたものである。

Table 3 から中学生女子の場合には、自我強度と自己効力感とは強い相関はないものの、男子の場合において「観察自我の芽生え」や「現実感の芽生え」という自我の発達と自己効力感とは強い正の相関があることがわかる。

この差は、思春期における自我の突然の構造的変化である Spranger (1924) のいう自我体験を男子にとっては乗り越えられる自信(自己効力感)があるかどうか重要であり、一方、女子にとっては大きな身体的変化をとまなう第2次性徴は、斉藤(1985)がいうように他者評価からの身体満足度と強く関連しており、自己効力感は、他者評価の影響が少ないことから(Bandura, 1977)、自我強度との関連が弱いととらえられる。

Table 4 は、高校生と大学生の場合の自我強度尺度と自己効力感尺度との得点の相関係数をまとめたものである。

Table 4 から高校生の場合も大学生の場合も中学生よりも現実吟味能力(reality testing)が発達していくことから自我強度と自己効力感とは強い正の相関があることがわかる。

性差については、大学生女子の場合、「欲求不満耐久度」は、自己効力感と相関がなく、大学生男子の場合は双方の相関が強い。この差は、女子大学

Table 2 学校段階・性別の自我強度、自尊感情、自己効力感の3尺度得点間の相関係数

学校段階・性		組み合わせ		
		自尊感情と自我強度	自我強度と自己効力感	自己効力感と自尊感情
中学生男子	n = 45	.39**	.39**	.41**
中学生女子	n = 53	.27*	.31*	.59**
高校生男子	n = 86	.31**	.48**	.38**
高校生女子	n = 109	.45**	.52**	.54**
大学生男子	n = 89	.43**	.66**	.48**
大学生女子	n = 86	.60**	.40**	.40**
全体	n = 468	.42**	.51**	.32**

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

Table 3 自我強度尺度得点と自己効力感尺度得点との相関係数（中学生）

自我強度下位尺度	相関係数
欲求不満耐久度	.15 .08
観察自我の芽生え	.29* .27*
現実感の芽生え	.41** .02
柔軟な自己	.40** .12
合計得点	.39** .31*

上欄の数値は男子を、下欄の数値は女子の場合を示す。

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

Table 4 自我強度尺度得点と自己効力感尺度得点との相関係数（高校生・大学生）

自我強度下位尺度	相関係数
欲求不満耐久度	.42** .35** .38** .11
自我同一性の確立	.32** .49** .59** .37**
適応的自己	.32** .32** .58** .36**
現実自己	.36** .53** .50** .51**
合計得点	.47** .57** .76** .43**

第一欄は高校生男子、第二欄は高校生女子、第三欄は大学生男子、第四欄は大学生女子を示す。

\*\* $p < .01$

生は、女性どうしの相互の支え合いが強いことから「欲求不満耐久度」、いわゆるがまん強さの必要性が乏しいことや男子大学生は、学生生活においてひとりでやれるかどうかという自己が試される機会が多いこと、たとえばアルバイトや就職活動など自らを試す機会をつくることが多いことによる差もとらえられる。

## 2) 自我強度と自尊感情との関係

Table 5 は、中学生の場合の自我強度尺度と自尊感情尺度との得点の相関係数をまとめたものである。

Table 5 から中学生男子の場合において自我強度と自己効力感との関連と同様に「観察自我の芽生え」や「現実感の芽生え」という自我の発達と自尊感情とは、正の相関があることがわかる。

一方、中学生女子の場合は、「柔軟な自己」と自尊感情とに正の相関が示され、このことは女子の場合、男子に比べて対人関係が重要視されることから（落合・佐藤、1996）、柔軟にふるまえる自己は自尊感情と関連があるととらえられる。

Table 6 は、高校生と大学生の場合の自我強度尺度と自尊感情尺度との得点の相関係数をまとめたものである。

Table 6 から高校生の場合も大学生の場合も「現実自己」と自尊感情とは強い正の相関があることがわかる。

このことから、自尊感情は自己効力感とは異なって、現実外界と関わる自己評価の意味をふくんだ概念であることが示唆された。このことは、学校段階差や性差に関わらず自尊感情は現実外界との交流によって果たされる「自我同一性の確立」や「現実自己」との相関が強いことからとらえられた。

## 3) 自尊感情と自己効力感との関係

Table 2 の自尊感情と自己効力感との相関係数から学校段階差や性差に関わらず双方は関連があることがわかる。

しかし、Table 2 の全体的場合の自我強度と自尊感情の相関係数と、自我

強度と自己効力感の相関係数とを比較すると自尊感情と自己効力感の相関係数のほうが、幾分、低いことがわかる。この相違は、既述したように自尊感情の概念のほうが自己効力感の概念よりも現実外界との関わりを基盤とした内容をもつという違いから生じているともとらえられる。その根拠として菅（1984）が、自尊感情という概念がもつ対人関係の影響を受ける健康な自己愛を強調していることがあげられる。

また、とくに中学生女子の場合、自尊感情と自己効力感との相関が強いことがわかる。このことから、とくに中学生女子においてグループでの関係が重視され、この関係が上手にできること（自己効力感）が自己評価（自尊感情）を高めているのではないかということがとらえられる（石本ら、2009）。

以上の Table 2 から Table 6 までの結果とその考察をまとめると自己効力

Table 5 自我強度尺度得点と自尊感情尺度得点との相関係数（中学生）

自我強度下位尺度	相関係数
欲求不満耐久度	.19
	.10
観察自我の芽生え	.31*
	.09
現実感の芽生え	.20
	.09
柔軟な自己	.08
	.21
合計得点	.39**
	.27*

上欄は男子を、下欄は女子の場合を示す。

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

Table 6 自我強度尺度得点と自尊感情尺度得点との相関係数（高校生・大学生）

自我強度下位尺度	相関係数
欲求不満耐久度	.13
	.31**
	.01
	.28**
自我同一性の確立	.30**
	.25**
	.42**
	.50**
適応的自己	.06
	.25**
	.58**
	.45**
現実自己	.35**
	.38**
	.36**
	.57**
合計得点	.28**
	.42**
	.30**
	.59**

第一欄は高校生男子、第二欄は高校生女子、第三欄は大学生男子、第四欄は大学生女子を示す。

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

感は、現実外界の対人関係を通した自信というよりも自己内省してとらえた自己についての自信を意味しており、一方、自尊感情は Sullivan (1953) や Maslow (1962) がいうように現実外界の対人関係を通した自己のもつ自信の意味がふくまれていることがとらえられた。しかし、自我強度は自己効力感や自尊感情とは異なり、「欲求不満耐久度」や「観察自我の芽生え」などの自己内省してとらえた自己と「自我同一性の確立」や「適応的自己」などの現実外界との関わりを通した自己という多面的な自己についての自信の意味がふくまれていることがとらえられた。

このようなことから、3つの心理療法学派の心理療法効果基準は共通点はあるものの、とくに対自的な心理療法の効果基準としては、自己効力感の程度を、また、対人関係や現実外界との対他的な心理療法の効果基準としては、自尊感情の程度を、対自的にも対他的にも心理療法の効果がとらえられる基準としては、自我強度の程度をみていくことが望ましいことが示唆された。

### [まとめと今後の課題]

本研究は、以下の通りに要約できた。

(1) 自我強度、自己効力感、自尊感情の学校差に関して、高校生の場合、受験中心の高校のほうがそうではない高校よりも3つの尺度得点は有意に高いことが示された。また、大学生の場合、文科系大学と理科系大学との間に3つの尺度得点に差がないことが示されたが、男子の場合、教育学部学生のほうが工学部学生よりも自我強度が強いことが示された。

(2) 3つの尺度得点の学校段階差と性差に関して、自己効力感は、女子のほうが男子よりも強く、自尊感情は、中学生は高校生や大学生よりも低いことが示され、自我強度は、高校生と大学生の場合では学校段階差と性差は示されなかった。

(3) 学校段階差や性差に関わらず、自我強度、自己効力感、自尊感情の3つの尺度得点間に有意な正の相関が示された。このことから、精神分析療法、クライエント中心療法、行動療法の効果基準は、共通していることが示唆された。

(4) 学校段階別・性別の2つの尺度得点間の相関係数の結果から、自己効力感は、自己内省的な自己評価を、自尊感情は、対人関係を通じた自己評価を意味しており、自我強度は、自己内省的評価も対人関係を通じた自己評価もふくむ多面的な自己評価を意味していることがとらえられた。

しかしながら本研究の問題点は多く、たとえば心理測定尺度は多くあり、本研究で用いた尺度が研究目的に適した尺度であったかどうかの検討や本研究の結果をさらに一般化していくためには調査対象数を増やしてとらえていくこと、また、病態水準と自我強度、自尊感情、自己効力感との関連をみていく必要があることがあげられる。また、実際の心理療法は折衷的アプローチが多いことからこのアプローチの治療効果基準として自我強度、自尊感情、自己効力感のどれが望ましい基準なのかを今後、検討していく必要がある。

## [謝辞]

本研究を実施するにあたり、各県各中学・高校・大学の教員と生徒・学生の方々に多大なるご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

## [引用文献]

- Bandura, A. 1977. Self-efficacy. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Freud, S. 1916. *Vorlesungen der Einführung in die Psychoanalyse*. Frankfurt; Fischer Verlag. (井村恒郎・馬場謙一 (訳) 1970. 精神分析入門 上・下フロイド選集1・2 日本教文社)
- 後藤由起子 1998 行動化を契機として成長を遂げた境界例Y子 心理臨床学研究, 16, 290-301.
- 石本雄真・久川真帆・斎藤誠一・上長然 2009. 青年期女子のライフスタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, 20, 125-133.
- 上地雄一郎 1991 思春期危機を契機に発症した抑うつに対する精神分析的な心理療法の一例 心理臨床学研究, 8, 29-41.
- 金子周平 2016 我が道の歩き方がわからない成人女性との面接を通じた非指示的概念の再検討 心理臨床学研究, 34, 435-445.
- 小泉葉月・平口真理 2004 強迫性障害の認知行動療法 心理臨床学研究, 22, 347-357.
- 古賀章子・前田正治・津田彰 2007 ドメスティック・バイオレンス事例に対する認知行

- 動療法的アプローチ 心理臨床学研究, 25, 60-71.
- Maslow, A.H. 1962 *Toward a psychology of being*. New York; Van Nostrand. (上田吉一 (訳) 1964 完全なる人間 誠信書房)
- 長尾博 2007. 自我強度尺度作成の試み 心理臨床学研究, 25, 96-101.
- 長尾博 2016 女ごころの発達臨床心理学 福村出版
- 中原睦美 1995 病める体に苦悩する人間への援助的接近について 心理臨床学研究, 12, 322-332.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由起子 1995 特性的自己効力感尺度の検討 教育心理学研究, 43, 306-314.
- 日本心理臨床学会 1991 臨床心理士の基本技術 心理臨床学研究, 9, 12-13.
- 日本臨床心理士会 2006 臨床心理士の動向ならびに意識調査報告書 pp. 17.
- 岡田努・永井徹 1990 青年期の自己評価と対人恐怖の心性との関連 心理学研究, 60, 386-389.
- 小此木啓吾 1976 青年期精神療法の基本問題 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦 (編) 青年の精神病理 弘文堂 pp. 239-294.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton; Princeton University Press.
- 斉藤誠一 1985 思春期の身体発育の性役割意識の形成について 教育心理学研究, 33, 336-344.
- Sherer, M. et al. 1982 The self-efficacy scale. *Psychological Reports*, 51, 663-671.
- Spranger, E. 1924 *Psychologie des Jugendalter*. Wiesbaden; Quell&Meyer. (土井竹治 (訳) 1973 青年の心理 五月書房)
- 菅佐和子 1984 心理療法場面からみた女子青年の Self-Esteem の問題について 心理臨床学研究, 2, 25-37.
- Sullivan, H.S. 1953 *Interpersonal theory of psychiatry*. New York; W. W. Norton. (中井久夫ら (訳) 1991 精神医学は対人関係論である みすず書房)
- 山本真理子・松井豊・山成由起子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

# The Relationship among Ego Strength, Self-Esteem, Self-Efficacy during Adolescence

Hiroshi Nagao

## Abstract

The purpose of this study was to investigate the relationship among ego strength, self-esteem, and self-efficacy in order to clarify the common of the effective criteria in various psychotherapy during adolescence. 98 junior high school students, 195 senior high school students, and 175 university undergraduate students completed the Ego Strength Scale (Nagao, 2007), the Self-Esteem Scale (Rosenberg, 1965), the Self-Efficacy Scale (Sherer et al., 1982). The main results were as follows; (1) A significant positive association was found among ego strength, self-esteem, and self-efficacy regardless of grade or gender. (2) According to the correlations among each two scales, while the concept 'self-efficacy' would mean self-evaluation by intrapsychic inspection, the concept 'self-esteem' would mean self-evaluation by interpersonal relationship, the concept 'ego strength' would include both of these meanings. These results suggested that ego strength, self-esteem, and self-efficacy would be the common of the effective criteria in various psychotherapy during adolescence.

## Keywords;

ego strength; self-esteem; self-efficacy; adolescence; common criterion of psychotherapy

本研究の目的は、さまざまな青年期の心理療法に共通する効果基準を明らかにするために自我強度、自尊感情、自己効力感の関係を検討するものである。98名の中学生、195名の高校生、175名の大学生に対して自我強度尺度(長尾、2007)、自尊感情尺度(Rosenberg、1965)、自己効力感尺度(Shererら、1982)を実施した。その結果、(1) 学校段階差や性差に関わりなく、3尺度間の相関は有意な正の相関が認められた。(2) 各2尺度間の相関係数から自己効力感の概念は、自己内省による自己評価の意味が、一方、自尊感情の概念は、対人関係を通しての自己評価の意味がふくまれるが、自我強度の概念は、これら2つの意味をふくんでいることがとらえられた。本研究の結果から自我強度、自尊感情、自己効力感は、青年期のさまざまな心理療法の共通した効果基準であることが示唆された。

キーワード

自我強度；自尊感情；自己効力感；青年期；心理療法の共通した効果基準